井勝一郎全集

第五巻

講談社

亀井勝一郎全集　第五巻

昭和四十七年九月二十日　第一刷発行
昭和四十九年二月二十日　第三刷発行

定価　二三〇〇円

著者　亀井勝一郎

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京〇三(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©亀井葵子　昭和四十七年

Printed in Japan

0395-135057-2253（1）　(文1)

龜井勝一郎全集　第五巻

編纂

河上徹太郎

中村光夫

丹羽文雄

山本健吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五巻　目次

島崎藤村論

詩　人……一三
沈黙と表現……一三
明治のロマンチシズム……一七
処女崇拝と罪の悦び……二三
漂泊のしらべ……三〇
詩　論……三七
散文家としての変遷……四七
無頼派……四七
破戒について……五三
自伝的作家として……五九
家……六九
亡霊の巣……六九
結婚生活……七四
食後と微風……七九
旅人と市隠……八五
フランスの旅より……八五
青春の回想と海……九三
新生について……一〇三
市　隠……一一八
文明批評家……一二五
時代と文学者……一二五
十九世紀日本の考察……一三
歴史と血統……一三九
夜明け前について……一三九
第二の春……一五八
故　郷……一六四
後　記……一六九

現代作家論

丹羽文雄……一七五
「爬虫類」を中心に……一七五
煩悩具足……一八〇
丹羽文雄の思想……一八六
大岡昇平……一九五
椎名麟三……二〇一
武田泰淳……二〇六
後　記……二一一

文学・人生・社会

文学について……二二五
文学を離れて文学に帰ること……二二五
青春の文学……二二七
文学者と自殺……二二九
現代小説への疑問……二三四
文学は有罪か……二三八
新聞小説への空想……二三八
詩人の所在不明……二四〇
美術と文学……二四五
自由への道……二五一

無頼派の祈り

1

太宰治の人と作品……二五九
序……二五九
告白と虚構……二六〇
家と二人の老婆……二六一
革命の跫音……二六二
時代の継子……二六四
廃墟……二六五
ユーモアと軽み……二六六
無頼派の抵抗……二六七
聖　書……二六八
無頼派の祈り……二七一
罪と死……二七六
感受性の犠牲者……二八二
愛情と奉仕……二八四

2

太宰治の肖像……二八五
作品解説……二九四

3

太宰治の思ひ出……三二七
罪と道化と……三三四
出版記念会の頃……三三四

三鷹移住……三三五
鮎つりのことなど……三三七
戦争の頃……三三八
最後の三年間……三三九
文化の碑……三四〇
回　想……三四三
三鷹村下連雀……三四四
後　記……三四六

文芸評論（昭和二十八年――三十一年）

宮崎智恵――日本歌人群像㈠――……三三一
古川政記――日本歌人群像㈡――……三三四
「島崎藤村」瀬沼茂樹著……三三七
現代文学の課題……三三九
梁雅子――日本歌人群像㈢――……三三四
「愛と死」武者小路実篤……三三七
文芸時評……三三八
「縮図」徳田秋声……三三三
文学精神の衰弱……三三五
古典と現代文学……三三七
「百物語」森鷗外……三六二
「出家とその弟子」倉田百三……三六三
山本保――日本歌人群像㈣――……三六五
「百年単位」の俯瞰　歴史小説雑観……三六八
童心と常識　二つの翻訳書……三七〇
古典語と現代語……三七二
愉しき知性……三七四
新聞小説について……三七六
性的好奇心について……三七八
日本再発見……四〇〇

二つの問題作 ——丹羽の「青麦」と堀田の「歴史」——……四〇一
追想集「内村鑑三先生」について……四〇四
今年の文学的課題……四〇六
獅子文六の「娘と私」……四一〇
丹羽文雄氏の「蛇と鳩」……四一三
石川達三の「悪の愉しさ」……四一三
ユニークな自伝 「私の詩と真実」
河上徹太郎著……四一六
舟橋聖一の「夏子もの」……四一七
丹羽文雄の「庖丁」……四一〇
立野信之「東京裁判」……四一三
漱石の倫理観……四一五
宇野千代の「おはん」……四一九
佐古純一郎「椎名麟三論」……四二二
中野重治の「むらぎも」……四二三
中堅作家論 ——その完成と未完成——……四二五
小池徹郎「『青麦』の問題性」……四二七
久米邦武の「日本古代史」その他……四二八
木山捷平詩集「メクラとチンバ」……四四〇
芥川賞と直木賞 ——新人の二つの型——……四四一
田野辺薫「苛烈と凡常の文学」……四四五
チェムバレンの「鼠はまだ生きてゐる」……四四六
獅子文六の「青春怪談」……四四八
藤村文学入門……四五一
入選作なし……四六一
井上靖の「あした来る人」……四六二
唐川富夫「伊藤整試論」……四六五
源氏鶏太の「天下泰平」……四六六
井上友一郎の「一四七〇哩」……四六八
消耗品化する軽小説 新年号の文芸誌……四七一
独特な人間の戯画化 「青春怪談」
獅子文六著……四七三
作品と批評に関する覚書……四七四
川端康成氏「山の音」……四八一
「旅愁」はなぜ読まれるか……四八二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩人・伝統・民衆……四八
宗教的人間武者小路実篤……四九
心にとどめてきた作家たち……四九
遠藤周作について……四九
旅行記の重要さ……四九
島崎藤村……五〇〇
われらの中の異邦人性……五〇二
「形影抄」覚書……五〇五
たつた一つの問題作……五〇八
不振の新年号創作……五一一
小説家を志す人へ……五一三
武者小路実篤と私……五一四
詩人藤島宇内に……五一五
有閑と性の自己陶酔……五一六
「古典と現代文学」山本健吉著……五一八
賭博的作品の一典型「太陽の季節」をめぐつて……五一〇
批評家の誇大妄想癖について……五一三
「少将滋幹の母」覚書……五一六
論争の発展のために……五一一
評論の読者へ……五二四
権力の場の文学論……五二五
津軽のダンディズム 今官一君のこと……五二七
推敲の魔術 ——井伏鱒二氏の文体——……五二八
人間復活の可能性……五四
和歌は「学問の娘」会津八一先生のこと……五四八
山本健吉論……五五〇
解題……五五四

島崎藤村論

詩人

沈黙と表現

藤村の詩と散文を貫く情熱の性格をもし一語に要約するならば、彼自身が「春を待ちつゝ」に述べたやうに、「情熱をして静かに燃えしめよ、湿れる松明のごとく」といふ言葉が最もふさはしいだらう。長い封建の夢が破れて、日本が近代社会へと変革されてゆくすがたを晩年の藤村は「夜明け前」に描いたが、青年藤村の声としてまづあらはれたのはその夜明けを告げる歌であつた。明治の青春のしらべであつた。「若菜集」と「夜明け前」のあひだには四十年近い月日が流れてゐる。成長の途上にある人と、円熟期に達した人との差異はあるが、彼の情熱は、「湿れる松明」のごとく、或は地を這ふ野火のやうに執拗に燃えつゞけた。詩集をよみながら、私はその長い息吹を思ひ出した。この情熱を保つために独特の沈黙のあることをも思ひ出した。封建的遺風のつよい木曾の旧家に育つた彼の祖先の、言ふに言はれぬ思ひといふ沈黙の重さが、彼の言葉の重さを支へてゐるやうである。

容易に表現を得ないときの苦渋、無念の情や忍従や愛憎の呻きを、藤村は父祖から背負はされてきたらしい。おそらく万人がかうした思ひを抱いてゐる筈だが、何らかのかたちを与へないかぎり、心は鎮まらないだらう。沈黙は言葉の母胎である。言葉はその胎内に忍従しながら、苦悩といふ栄養を吸つて育たなければならない。育つまでの時間を精密に計量し、それを待つところに藤村の忍耐があつた。表現する動機の純粋化のための時間と云つてみてもよい。いかに沈黙に耐へたか、そこでの性格が言葉の性格を決定するだらう。

藤村は成熟するにつれてこの沈黙の源をさぐり、それにとらはれ、重々しい意味を与へながら一種の鎮魂歌を奏でた人だ。父のために、或は自分のために。それは彼のしめやかな情熱にふさはしい形式であつたらしい。作品の殆んどは独特な沈黙の上に成立したもので、詩と散文を通して、彼の自己形成におけるこれは見のがしえない特徴だと思ふ。自覚してさういふ性格を人物の上に構想したのは「破戒」からだが、

詩にもすでに歌はれてゐる。「吾胸の底のこゝには、言ひがたき秘密住めり」（「落梅集」）といふ一節のごとき、全作品の主題歌とみていゝのではあるまいか。全作品を眼の前に眺めうる今の、私の一解釈にすぎないが、彼の詩こそ彼の散文の「原因」であつたことを私は至るところに感ずる。詩と散文（あの尨大な長篇小説）とを、私は同じ比重において考へたい。

*

「詩歌は静かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや。げに、わが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。」

「若菜集」（明治三十年、二十六歳）「一葉舟」「夏草」（同三十一年）「落梅集」（同三十四年、三十歳）の四詩集をあはせて、藤村詩集と題して公にしたのは明治三十七年九月であつた。右の言葉はそのときの序文の一節だが、藤村はこの頃すでに詩作をやめて散文の世界に入つてゐた。「破戒」も起稿されてゐた筈である。同じ序に、「思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に励まされて、われも身と心とを救ひしなり」と述べてゐるが、「破戒」をかく折の気持がすでに混入してゐたとみて差支へあるまい。

明治二十九年、二十五歳の藤村は仙台の東北学院へ教師として赴任し、「若菜集」はこゝで生れた。それまでの青年時代については、後に「春」「桜の実の熟する時」等で描いたし、感想集にも屢ゝ当時が回顧されてゐる。昭和十年（六十四歳）に自ら編纂した詩集「早春」には、様々の解説や感想も加へられた。詩の成立前後の状態は、作者によつて語りつくされてゐると云つていゝわけだが、そのまゝうけとるのは危険だらう。後年の解釈や感想はまた別ものである。さきの「序文」すら、実際に詩作してゐたときの心を必ずしも適切に告げてゐるとは云へない。藤村詩を語る人の殆んどは「序文」をたよりとしてゐるが、たよりすぎてはいけないと思ふ。

私は彼の作品全体に通ずる「沈黙」のすがたを一瞥するために一節をひいてみたのだが、この沈黙を彼自身は「おぞき苦闘」と名づけた。迷ひ、優柔不断、名のつけやうのない憂鬱、生の恐怖、山国人特有の口の重さなど、緩慢で鈍重な苦しみの持続が推察される。私はそれを藤村的時間ともよんでみたい。求道性にむすびついた重厚な漂泊と凝視の時間である。漱石の沈黙には、低徊するやゝのびやかにみえる悲しみがあり、鷗外の沈黙には、鋼鉄のごとき犀利な明晰さが感ぜられる。二者に比べて藤村は鈍重だが、「重き荷を負うて遠き坂道を行くがごとし」と云つたおそるべき辛抱づよさがあつた。知的論証よりも、肉体を以てする身証力にまさると云つた感がある。自分の発しようとする言葉が、完全に自分の肉体に根をおろしてゐると認めるまでの執拗な時間である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com